法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

東京と文学(1)近代化過程における相互の関連について

高木，利夫

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要．人文科学編 / 法政大学教養部紀要．人文科学編
(巻 / Volume)
90
(開始ページ / Start Page)
75
(終了ページ / End Page)
101
(発行年 / Year)
1994-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004584

Hosei University Repository

東京と文学（1）

＝近代化過程における相互の関連について＝

高木利夫

序

一八六八年、慶応四年七月十七日、上野の彰義隊が鎮圧された後、江戸に対して詔書が下された。その中に、

「……江戸ハ東国第一ノ大鎮、四方輻輳（フクソウ）ノ地宜（ヨロ）シク親臨以テ其政ヲ視ルベシ、因（ヨッ）テ自今江戸ヲ称シテ東京トセン。是朕ノ海内（カイダイ）一家、東西同視スル所以（ユエン）ナリ……」

という一節があった。江戸はこの日に東京と改称されたのである。つづいて、同年九月八日、会津若松城攻略戦の真最中に年号が明治元年と改められた。そして、九月二十日には明治天皇が二千人の兵に守られて京都を出発、東海道を進んで、十月十三日に江戸に入った。この時に江戸城は東京城と変更することに決った。

天皇東幸は、長い間、その膝下で暮してきた将軍には親しみを感じても、遠い関西の地にいてこれまで無縁であった天皇には何の感情も抱いていない江戸の民衆に対するデモンストレーションでもあった。そのため新政府の指導者たちは、天皇の乗る鳳輦（こし）を御簾（みす）で囲った。天皇の姿は直接、民衆たちの眼には触れず、シルエットだけが浮び上る。神秘的な雰囲気をかもし出すための演出であった。そればかりではなく、一か月もしない十一月四日には、江

Hosei University Repository

戸の町人から東京の市民に変わった民衆たちに酒が振舞われた。一、五九二町に二、五六三樽の酒と酒を入れてつぐ瓶子が配られたのである。これを「天杯頂戴」という。民衆は十一月六日、七日の両日、仕事を休み、山車や屋台を繰り出して、久しぶりの祭り気分にひたった。

これを見て、諸外国も「みかど政府」を日本の中央政府として正式に承認することになった。天皇はその年の十二月、いったん京都に戻り、翌明治二年三月二十八日に再び東京に来着した。この時に東京は事実上、日本の首都と決ったのである。「東京奠都」と言われる。曲りなりにも近代的な中央集権国家が誕生したことになる。

もっとも、東京が「とうきょう」という呼称で固定したのは、明治も十年以上経過してからで、それまでは「とうけい」という呼び方もあったし、東京と書き、「とうきょう」「とうけい」と読ませる例もあった。とにかく暫くは以上四種類の呼称が並行して用いられていた。

こうして江戸が東京に変わってから百二十五年、関東大震災と第二次世界大戦の戦火という二度の大災害によって潰滅的な打撃を受けはしたが、東京は奇跡的に甦り、日本の首都、政治・経済・文化の中心として発展を遂げてきた。日本の近代化は東京を実験場として推進されてきたのである。近代化は即ち西欧化であったわけだが、東京は常にその先端に立たされてきた。近代化の象徴であったのだ。しかし、それが余りにも性急であったが故に多くの矛盾や混乱を惹き起した。東京はその負の要素も集約化した形で引き受けてきた。

現在、東京圏の人口は約三千万人、全国土の三・六パーセントに過ぎない地域に全人口の二十五パーセント、四分の一の人たちが居住していることになる。一極集中によるひずみが問題にされるのも無理はない。首都機能の一部を移転する案も浮上してきているが、しかし、集中しているが故に効率的である面を無視できないので、そう簡単には実現しないであろう。むしろ、日本の国際社会に占める位置が高まるにつれ、東京の果す役割はいよいよ重要性を増してきている。

なぜ、それほど多数の人たちが大都会東京に集まってくるのか。自分の可能性を伸ばす機会や欲望を満たす場所が無数にあるという幻想を抱かせるからだとも言える。その点は明治の昔も今も変わらない。青雲の志を抱いて上

Hosei University Repository

京するという明治の青年たちの姿は、「立身出世」という言葉がすでに死語と化している現在ではもう見られないとしても、大学が集中し、企業が群がる東京に未来の夢を賭ける青年たちが集まってくるという点では、実質は似ている。だが、東京にはそれだけではない多くの魅力がある。

その一つは世界有数の情報都市という利点である。いま、産業構造が大きく変化しようとしている。農村が主体であった自然産業から工場が主体であった工業産業へと推移した後、都市が主体となる情報産業へと変わってきている。脱工業化社会へと変貌を遂げつつあるということである。脱工業化社会は情報化社会とも言われる。高度なテクノロジーを駆使したコンピューターというハードと情報というソフトとが連動して利潤をうむ。そういう産業が比重を増していく社会になってきたのである。東京には世界の先端的な情報が集まる。金融からファッションまで、政治、経済、科学技術、医学、文化などあらゆる情報が飛び交う街、それが東京なのである。そして、巨額な資金が動く。東京の金融市場はすでにロンドン、ニューヨークと並んで世界の金融センターになっている。東京は世界の「コック・ピット」であるとも言われる。

第二の魅力はその混沌とし、雑然とし、無秩序に見える点である。東京はアメーバー都市、モザイク都市、コラージュ都市だと言われる。ちょうど蚕が桑の実を端から食べていくように拡散的に広がっていく街で、合理的なグランド・デザインはほとんど感じとれない。それはヨーロッパの都市と比較してみるとよく分る。ヨーロッパは基本的に城廓都市である。中心にその都市の象徴である寺院なり王宮なりがあり、街の周囲を城壁で囲う。城廓内に象徴をポイントにして基本計画が立てられるのである。

東京の場合は、ロラン・バルトが『表徴の帝国』で指摘しているように中心が空白になっている。虚になっている。皇居がその虚の象徴であるとバルトは言うのだが、中心が空っぽであれば、街が無秩序に広がっていくのを抑えることは出来ず、混沌とした空間が生まれる。そして、そこには随所に盛り場や裏街が発生する。それは江戸時代から見られる現象で、吉原、浅草、両国などに代表される悪所が栄え、人間臭い文化が花開いた。今の東京にも新宿や渋谷など、若者を惹きつける盛り場が出来、悪と快楽の匂いを発散させている。城廓都市から来た欧米人に

Hosei University Repository

はこのように混沌とした無秩序な街にこそ魅力を感じるという人は多い。

第三は匿名性の自由という点が上げられる。どこの誰とも分らずに暮すことが出来る、その自由が魅力なのである。一歩、家の外に出て、雑踏にまぎれこめば、自分を知っている人間は誰もいない。その時の解放された気分。東京砂漠といい、群衆の中の孤独というが、それを否定的にではなく、肯定的に捉えなおせば、東京は精神の解放区であるという言い方が出来るのである。匿名でいられるからこそ、束縛のない自由が保証されるのである。

第四には劇場都市としての東京という魅力を上げることが出来る。自由に発想された、多分に実験的な建築物や街並みが増えてきた現在、東京は華やかな背景に恵まれた街になった。街全体が一つの劇場、一つの舞台に喩えることが出来るようになった。街を歩く人々はひとりひとりが舞台に登場する俳優であり、同時に擦れ違う通行人たちの衣裳や仕種などを見、それを愉しむ観客のひとりでもある。俳優でもあり、観客でもあり、見たり見られたりする恍惚感。歩くこと自体が一つのパフォーマンスであり、自己表現の一種であること。そこに劇場都市としての魅力がある。ファッション・センスその他の感覚が磨かれるのも当然である。

感覚や感性を磨く場として東京が最適であることは誰もが否定し得ないであろう。五番目の魅力としてはその点が上げられる。今は特に感覚のみが肥大化する傾向が強く、種々の問題が発生してきているが、その加速化している流れはとめようがないのが現実である。歴史を遡ってみると、東京に人口が集中してきて、都市化現象、大衆文化現象が一つのピークを迎えたのは大正の末から昭和の初めにかけてで、モガ、モボに象徴されるように感覚的享楽を求める頽廃的な傾向があらわになった。文学の分野でも、大正十三年に雑誌『文芸時代』を創刊したグループ、新感覚派が誕生している。しかし、その傾向は東京が戦火によって廃墟と化したのでいったん終息したが、再び甦り、現在はいっそう尖鋭化した形で蔓延している。

川本三郎はその著書『都市の感受性』[1]の中で「都市の感受性」と「都会的感覚」とはまったく違う、と指摘している。「都会的感覚」とは、まだ都市と農村の図式が残っている時代の言葉であって、現代にはもはや通用しない。「都市の感受性」とは、都会人の感受性ではなく、都市そのものの感受性、人間の感受性ではなく、人間を越えた、

Hosei University Repository

あるいは人間ひとりひとりの個性を無化してしまうような、空間としての都市の感受性である、として、

「私たちはいま『虚体感覚』とも呼ぶべき異様な病いに犯されている。生きている実感がない、肉体的な確かさがない。自分が自分でない、過去の自分との連続性がない、……そうして自分が『虚体』のように感じられてくる」

と言っている。そして、その「虚体感覚」が若い作家たちに共通に見られる要素だというのである。

ただ、それら若い作家たちの文学については必ずしも肯定的に受けとめられているとは言えず、現在はむしろその反動としての揺り戻し現象が起っているとも考えられる。日本の実質であった固有の土俗性がそう簡単に消滅するはずがないからである。しかしそれでも、川本の指摘は極端ではあっても東京及び東京人の現在置かれている状況をある側面から正確に射抜いていることは確かである。

さて、このように数多くの魅力を秘めた東京は日本の首都として発展を遂げてきた。出版文化の分野でも、出版社のほとんどが東京に作られた。大手の印刷会社も同じである。そうなれば、出版社と密接な関係を保たねばならない文学者たちが便利な東京圏に居住するのは当然で、東京を中心に交友が行われるようになった。文壇と呼ばれる一種のギルド組織も、その実体は曖昧で分りにくいものだが、多分、明治末期の自然主義系の文学者たちの間に自然発生的に生まれたものであろう。新しい表現を目指して研鑽を積むグループがその周辺に絶えず作られていく。こういう事態になれば、東京を舞台にした、東京を素材にした作品が出来上るのは自然で、数多くの優れた詩歌や小説が誕生することになった。

日本の近代文学を検討する場合、東京を無視することは出来ない。むしろ、東京を鍵にして百数十年を経過した文学との関連を解明していけば、思わぬ角度からその本質が浮き彫りになってくるかも知れない。本稿はその試みの一つである。

*

東京と文学との関連について検討する場合、江戸時代以来の伝統的な区分けが一つの手掛かりになる。常識的な

Hosei University Repository

方法だが、下町と山の手に類別し、対比させて考えてみるということである。

現在の東京の原型は、一五九〇年、天正十八年陰暦の八月一日に徳川家康が江戸城に入城して、城下町として大規模な土木工事を行ったことによって作られた。当時は現在の田町、日比谷、霞ケ関、新橋あたりに海岸線が通っていて、日本橋、京橋から有楽町にかけての一帯は江戸前島、あるいは江戸外島と呼ばれる海面すれすれの低い陸地であった。今日の下町の大部分は遠浅の海か、あるいは海でないまでも海岸の低湿地帯であって、ほとんど人の住むような土地ではなかった。

家康が入城直後に着手したのは、城の近辺及び西にあたる山の手台地に家臣の地行割り、屋敷割りを行って、武家屋敷の地帯として開発したことであった。徳川氏直属の旗本集団を配置した麹町の番町はこの時に出来た。こうして山の手の屋敷町が発生し、維新後も基本的な性格は持続した。谷間に小商人や職人たちの町が点在していても、陽の当たる高台には官公庁の役人や企業の上級職、大学教授、文化人など、日本の近代化を推進したエリートたちが居住する街となった。その後も西へ西へと発展していって、第二山の手と呼ばれる一帯が形成されつつある。こういう山の手に居住する作家、あるいは山の手を舞台とし、素材とする作品には、当然、共通要素として山の手的な特徴が指摘できるのである。

山の手台地に武家の屋敷町を造った後、家康は城下町のもう一つの機能である商人町、職人町を低湿地帯を埋め立てて建設することにした。経済活動をするには起伏の多い丘陵地帯は不便であって、舟運の便を得やすい低湿地帯のほうが適している。手始めに平川の河口から江戸城に通じる道三堀と呼ばれる舟入堀の開掘をし、以後、川と堀割りが縦横に走る水の豊かな市街地、下町が造成されていったのである。河岸に白壁の土蔵がびっしりと並び、白壁と白壁の間を多くの舟が行き交う美しい風景が生まれた。盛り場が出来、芝居小屋や遊廓などの遊び場が活況を呈し、江戸文化が花開いた。

しかし、維新後は下町は近代化から取り残され、落魄した敗残者たちの街のような雰囲気を持つようになった。そのかわり、近代化を急ぐ余り江戸以来の伝統的な文化を無惨にも破壊していく山の手とは違って、日本の実質と

Hosei University Repository

もいうべき文化、習俗、気質を頑固に残すことになった。同時に下町は、現在でこそ川の手と呼ばれて開発が進み、面目を一新しつつあるが、関東大震災後の復興計画では工業地帯に指定されて、中小の工場が建ち並ぶアンダー・ワールドともなった。近代化、工業化は下町を犠牲にして行われたのである。なお、住宅地帯は山の手、商業地帯は日本橋、銀座周辺が指定されている。

隅田川の両岸が工場地帯になっていったのは明治二十年代からで、鐘ケ渕紡績株式会社が操業を開始したのは明治二十二年である。その後、明治四十三年に大洪水があって、隅田川は氾濫し、江東地区は水びたしになった。これを契機にして荒川放水路の開削工事が始められ、大正十三年に完成する。これによって隅田川両岸の自然環境はすっかり変貌し、下町一帯は一挙に工業地帯に変わってしまったのである。

こうなると、下町と山の手の階層の差がはっきり表われるようになり、下町の住民たちは中央や山の手の連中に対して、いわれのない劣等感や羨望、敵意のようなものを抱くようになった。山の手は上昇する連中の住む街、近代化する日本、国際化していく日本の先端に位置する街というイメージが固定してきたのである。山の手は標準語の世界、コスモポリタンの世界、無国籍者の世界、人工的であり、抽象的である。それに反して、下町は東京の中の地方、東京方言の世界、日本固有の土俗性を引きずっている街、日本の根っこが残っている街ということになる。当然、そこには山の手の文学とは違う特徴を持った文学が生まれているはずである。

さて、そこで、便宜的であり、ある意味では強引であるけれども、

Ⅰ　下町の文学

Ⅱ　山の手の文学

という類型をたててみることにする。さらに、その上に、

Ⅲ　上京者の文学

を加えて、大きく三つに類別してみたいのである。

自らの可能性を試したい、自らの将来を開きたいという希望を抱いて、多くの人たちが地方から東京を目指して

Hosei University Repository

上京してくる。その中には文学の世界で自らの志を述べたいと願っている人たちも混じっている。恐らく近代文学者の半数近くがそれらの人たちによって占められているに違いない。あるいはもっと多いだろうか。当然、彼らの作品には下町や山の手を舞台にし、素材にしたものも数多くあるので、ⅠⅡの類型に組み入れることも可能であり、本稿でも、何人かはⅠⅡの中で取り上げる予定でいる。しかし、ダブることになるけれども、あえて上京者の文学として類型化するのは、彼らの文学には共通の要素として故郷と東京との関係が重要な働きをしているからにほかならない。東京を「中央」と見、自らの地方性を恥じ、地方性を絶ち切って、標準語の世界に変身しようとする。だが、感受性の根にある故郷と絶縁することは自らの文学性を死滅させることにもつながる。その矛盾、相克。それはつまりは日本近代化の縮図でもある。土俗性と国際性、その狭間で揺れ動く日本そのものの姿でもある。三番目の類型としてたてたのはそういう理由による。

Ⅰ　下町の文学

東京の中の地方であり、日本近代化の犠牲にされてきた下町は、それだけ多くの矛盾と屈折を抱えてきた。近代化の先端に位置する都市の一部でありながら、その影の部分、負の部分を押しつけられてきた街。影であるからこそ、破壊されていく伝統文化を辛うじて保持することの出来た街。人間関係が濃密であり、濃密であるが故に住人に愛憎相半ばする強烈な感情を抱かせた街。そういう街だけに内実は複雑であった。日本近代化の実相を展示しているショー・ウインドーのようなものであるとも言える。

そのためか、東京の下町を愛し、あるいは興味を抱いた文学者は数多い。外国の日本研究者も例外ではなく、例えばエドワード・サイデンステッカーは下町に強い愛着を持っていて、『東京下町山の手　1867～1923』[2]『立ちあがる東京』[3]という二冊の著作を通して東京の近代化の過程を追究しながら、次のように言っている。

「一般に下町は保守的である。（中略）江戸っ子は独りよがりだと批判することはできるかもしれない。いわば

Hosei University Repository

プロの江戸っ子の末裔は今日でもいるけれども、この手の連中の自尊心はむやみに強く、ほとんど無作法とさえ呼べるだろう。世界には下町と下町以外の土地という区別しかなく、そしてもちろん、下町以外はものの数にも入らない。谷崎潤一郎は仲間の江戸っ子を好まなかった。谷崎に言わせれば、江戸っ子は弱虫で、始終不平ばかりこぼし、概して実行力がない。しかし江戸時代の下町は、きわめて洗練された高度の趣味を具えていた。その後の時代の推移を見れば、この高度の洗練を維持してゆくには排他性が必要だったことも頷ける。とすれば、この程度の欠点はむしろ安い代償と言うべきかもしれない」

同様に『江戸から東京へ』[1]という著書を出版したフィリップ・ポンスも町人文化と庶民文化に焦点をあてて論述をすすめており、下町は捉えがたい世界である、その現実はあまりにもアンビヴァレントであって、容易に分析しがたい、として、

「下町とは、生きるしぶとさであり、ある『気質』であり、皮肉によって隔たりをおくことであり、さまざまなしきたりの展示場であるが、また日常的な現実であって、時にはそこに生きている者にとっては悲しいまでに単調な貧しさなのだし、それをまた散策者が行き当りばったりの感覚でとりちがえて魅惑的に覚えたりするのである」

「下町は要するに統合的な像（ヴィジョン）や、全体的な定義とは容易に折り合わない。下町の現実は白でも黒でもない。ブルジョワ的なヒューマニズムの系譜で庶民の人間性をたたえるとか、マルクス主義的文脈のなかで社会経済体制の不公平を告発するとかいった善悪二元論では説明できないのである」

何層もの土層から成り立っているようで、そう単純に割り切ることの出来ない下町の複雑さが、二人の言説からも読みとれるのである。

そこで、迷路に踏み込まないために、下町の文学をさらに三つに分類して論述をすすめることにする。

1. 下町で生まれ、育った人たちの文学。
2. 山の手で生まれたが、下町を愛し、好んで下町を素材にした人たちの文学。
3. 地方から上京してきて、下町を愛し、好んで下町を素材にした人たちの文学。

Hosei University Repository

*

1．下町で生まれ、育った人たちの文学。

この類型に入る文学者はけっこう数が多い。しかも、表現された作品は多様である。故郷に対しては誰しも多かれ少なかれ愛情と嫌悪、執着と憎悪、二つの相反する感情を抱くものであるが、東京の下町で生まれ、育った文学者には特にその感情が強いのか、極端にアンビヴァレントな傾向に分れる。

一つは故郷である東京下町に対する愛着が非常に強い人たちがいる。下町が好きで仕方がない。終生、下町への愛情を貫き、江戸以来の伝統文化が消滅していくことに限りない愛惜の情を抱きつづけた人たちである。下町への愛情は裏返せば、薩長土肥を中心とする江戸占領軍に対する反感や嫌悪につながり、ひいては山の手文化、山の手人種に対する反撥や批判にもつながる。大事な江戸が田舎者、野蛮人どもに荒された、と本気で思っているのである。これらの文学者たちをAとする。代表的な人たちを上げれば、幸田露伴、谷崎潤一郎、久保田万太郎、舟橋聖一、円地文子、永井龍男、芝木好子、幸田文、田久保英夫、吉村昭、川口松太郎、池波正太郎、評論家の福田恒存など。

一方、それとはまったく逆に下町で生まれ、育ったことを恥じ、嫌い、下町性、地方性を切り捨てて、山の手の標準語の世界に脱出した人たちがいる。近代化の先端を行く山の手人種に変貌し、近代文化の担い手になったのである。それらの人たちだとて、自分の根っこである故郷下町に対する愛情が消えたわけではないであろう。それでも隠しておきたい恥部のような意識から抜け切れなかった。従って、故郷下町を素材にする時は苦渋に満ちた表現になるか、多分にデフォルメする場合が多い。夕飯のおかずまで隣近所に分ってしまう下町では、自意識を獲得し始めた少年期や少女期、人たちは濃密な人間関係から自分の内面を隠して成長し、自己を確立する。その時の屈折が尾を引くのであろうか。これらの文学者たちをBとする。代表的な人たちを上げれば、堀辰雄、立原道造、中村真一郎、石川淳、評論家の小林秀雄など。

Hosei University Repository

さらにもう一つ、極端に分れるＡＢ二つのタイプのどちらにも組することが出来ず、両者の間を揺れ動く人たちがいる。はっきり割り切ることが出来ずに、両方の要素を保持しながら、中間点、境界線に位置を占める人たちである。これらの文学者たちをＣとする。代表的な人たちを上げれば、芥川龍之介、吉本隆明、小林信彦、など。

その他、Ｄとして、下町生まれ、育ちの文学者を上げておけば、長谷川時雨、安藤鶴夫、宇野信夫、小山清、唐十郎、青島幸男、早乙女勝元、小関智弘、半村良、増田みず子、栗本薫（中島梓）、評論家の長谷川如是閑、清水幾太郎、池田弥三郎、高橋義孝、富田均、詩人の高村光太郎、田村隆一、諏訪優、北村太郎、関根弘、鈴木志郎康、辻征夫など、まだ洩れがあるかも知れないが、かなりの数に達する。

１のＡ　故郷下町への愛情を持ちつづけた文学者たち。

幸田露伴は慶応三年に江戸下谷三枚橋横町に生まれ、明治三十年から大正十三年までの二十七年間、墨田区東向島に住み、住居を蝸牛庵と名づけた。代々幕府の表御坊主衆の家柄で、父は維新後、下谷区長、大蔵省官吏を歴任している。有職、故実、礼法に詳しく、露伴もその血筋を引いている。露伴の東京に対する深い愛着を端的に表現しているのは、明治三十三年に発表された『一国の首都』という論文である。その中で彼は、

「今の東京市民及び我邦一般の人民は、果して我が帝国の首都たる東京に対して真摯厳重なる意義においての愛情を有せりや、否や。往時のいはゆる江戸児が江戸を愛したる如き、燃ゆるが如き意気熱情を以て今の市民は我が東京を愛せるや、否や。（中略）江戸児の江戸を愛重せる実に深厚といふべきならずや。（中略）然るに今の東京の人民は如何。（中略）我は東京児なりと称して東京を尊重し、併せて自己を尊重することの何ぞ甚だ少きや」

と述べ、東京は醜悪な都市に堕落した、その責任は首都に対して愛情を持たない薩長出身の政府高官にあると批判している。そして、その後、近代都市へ向けての具体的な提言をしているのだが、大岡信は岩波文庫版の解説の中で、

「露伴ほどの強い愛情をもって東京という首都のことを考えた著述者は、この百年間、一人も出現しなかった」

Hosei University Repository

と強調している。

露伴には他に明治三十五年に発表された『水の東京』という一文がある。東京の川や堀割り、それをめぐる名所を列挙し、解説を付したものだが、一部を引用すれば、

「待乳山は聖天の祠あるをもて墨堤より望みたる景いとよし。（中略）ここの舞台は隅田川を俯視すべくして、月夜の眺望四季共に妙に、雪のあしたに瓢酒を酌んで、詩を吟じ歌を案ぜんはいよいよ妙なり」

舌なめずりせんばかりの文章で、恰好の東京案内になっている。

彼の小説でも、『風流仏』の彫刻師珠運にしても、『五重塔』ののっそり十兵衛にしても、主人公は江戸以来の頑固な職人気質を持った人物である。露伴はその職人に自分を投影して、それが維新後に求められている自己確立という理念に通じることを示しているのである。未完の大作『天うつ浪』は浅草を舞台にしているし、終生、幕臣の子でありつづけた作家であった。

露伴の娘、明治三十七年生まれの文は『おとうと』を初めとする自伝的小説や随筆で、生まれ育った向島と肉親を描いているが、その抑制のきいた文章には隅田川のほとりで身につけた繊細な感覚が冴えていて、きびきびした江戸下町の美意識を今に伝えている。

明治十九年に日本橋蛎殻町で生まれた谷崎潤一郎は江戸町人の血を受け継いだ生粋の江戸っ子であるけれども、今の東京には何の未練もない、と昭和九年に発表された『東京を思ふ』というエッセイの中ではっきりと書いている。そして、箱根に滞在中、関東大震災に遭遇した時、横浜にいる妻子の安否を気遣いながらも、しめた、これで東京がよくなるぞ、焼けろ焼けろ、みんな焼けちまえ、と思った、と述べた後、

「あの乱脈な東京。泥濘と、悪道路と、不秩序と、険悪な人情の外何物もない東京。私はそれが今の恐ろしい震動で一とたまりもなく崩壊し、張りぼての洋風建築と附け木のやうな日本家屋の集団が痛快に焼けつつあるさまを想ふと、サバサバして胸がすくのであった。私の東京に対する反感はそれほど大きなものであったが、でもその焼け野原に鬱然たる近代都市が勃興するであらうことには、何の疑ひも抱かなかった」

Hosei University Repository

パリやニューヨークのようなビルの林立する大都会の出現を夢見ているのである。

谷崎はすでに大正九年に発表された未完の小説『鮫人』でも、主要人物のひとり服部を通してではあるが、作者自身が身を乗り出すようにして、「東京は以前に比べると不愉快な都会になった。東京に生れて東京に育った彼は、自分の家が誰かに荒されているやうにも感じた」と痛烈に批判している。この小説の舞台は浅草だが、それについても、

「此の東京では何処にも『美』を求めることは出来ないのだから、醜悪が醜悪そのままの姿で現れて居る浅草が一番住み心地のいい場所だと云へないことはないであらう。其処には下町の中心地や山の手にあるやうな虚偽や不調和がなく」

と書いている。東京中央への反撥が根強いことが窺われる。文壇における名誉ある孤立はこの姿勢から結果したものに違いない。

谷崎の脳裏には幼少年時代を過した明治二十年代の日本橋界隈の光景が絶えず明滅していたのであろう。そこには人情豊かな下町の生活があり、お神楽や小芝居や縁日など、江戸以来の伝統文化が息づいていた。彼はそれらの思い出を昭和三十年に『幼少時代』として発表した。彼の感受性を培ったのどかで心豊かな下町の暮しぶりが再現されている。昭和三十三年には『ふるさと』という一文を『中央公論』に発表して、三十年ぶりに訪ねた故郷の変貌ぶりを探っている。

彼の文学について常に言われる悪魔主義、頽廃、耽美、グロテスク、マゾヒズム、淫蕩など、その多くはこの下町で享受した江戸以来の文化に根ざしていると見るべきなのである。幕藩体制が衰退期に入った文化、文政時代にその源流を求めることが出来るのである。関東大震災を契機として関西に移住することによって彼の文学は花開いたが、それも東京では消滅してしまった日本文化を再発見することが動機であったのだ。

明治二十二年に浅草田原町の袋物製造業の家に生まれた久保田万太郎は、小説、戯曲、俳句と多面的に活躍したが、典型的な下町作家として知られ、「くぼまん」という愛称で呼ばれていた。府立三中（現・両国高校）では芥

Hosei University Repository

川龍之介、堀辰雄などの先輩にあたる。サイデンステッカーも「生まれからしても、生涯変らぬ愛情を下町に持ちつづけたという点でも、彼こそは江戸っ子のもっとも雄弁な代表と見ていいだろう」[5]と述べ、「火の見」が消えたことを嘆いている彼の文章を引用している。火の見というのは火の見梯子や火の見櫓のことではなく、繁華な目抜き通りの商店の屋根に必ずとりつけられていたもので、土蔵づくりの日本家屋にとって、忍返し、駒寄、天水桶などとともに欠くべからざるものであった。瓦屋根と古びた木材のかもし出すくすんだ諧調、そこに下町の家並みの落ち着いた美しさがあったのに、それが消えてしまったというのである。映画の出現によって生まれ故郷浅草の町を構成していた店々が軒並み変わっていく様子も彼は書いている。いずれも近代化によって変貌し、消滅していく下町に寄せる深い愛惜と悲哀の思いがこめられている文章である。

久保田の作品は、小説、戯曲、俳句とも下町を素材とし、下町、特に浅草を背景としたものが多く、市井に生きる人々の哀歓を描いている。……を多用するのが特徴だが、しかし下町への思い入れが余りにも強過ぎたせいか、抒情に流れがちで、むしろ俳句のほうに家庭的に不幸であった彼の苦渋に満ちた内面が吐露されていると言われる。

しかし、彼は肩書が好きであった。日本芸術院会員、日本演劇会長、文化勲章受賞など輝かしい経歴を持ち、交友範囲も広く、文壇、劇壇、放送界、俳壇に勢力を伸ばした。俗物という批判を受けることも多く、山の手人種には下町でおどし、下町人種には肩書でおどすとさえ言われた。肩書好き、権威好きは下町コンプレックスの裏返しであったのかも知れない。浅草の後、日暮里、芝、鎌倉と居を移し、最後は再び湯島に戻ってきた。その住居の変遷が彼の屈折した内面を暗示しているのではないだろうか。

舟橋聖一は明治三十七年に本所横網町で生まれている。父は東大工学部教授、母は財閥古河合名理事長の娘という恵まれた家庭である。母方の実家はすぐ近くの本所番場町にあった。そのため舟橋は幼児から入りびたり、祖母にかわいがられた。芝居見物のお供をしたり、芸者が侍る宴席に出たり、筋向いの相撲部屋の力士たちと遊んだりと、存分に都会的、享楽的な雰囲気を味わった。こうして感受性が磨かれ、文学的土壌が醸成されたのである。彼は小学校在学中に山の手に移住してしまうが、大学教授や財閥の理事長が居住していたというところに、当時の下

Hosei University Repository

町がまだ東京の中心であったことが示されている。

円地文子も明治三十八年に浅草向柳原に生まれているが、彼女の父も東大文学部教授上田万年であった。彼女は浅草を舞台にした『川波抄』という小説の中で、

「何しろ新宿界隈に原っぱのあった大正中期頃のことで、町はあったにしても下町育ちからいうと半分田舎落ちの感じであろう」

と書いている。当時まだ田園地帯であった東京の西半分へ移ることは都落ちと同じであったのだ。しかし、それも間もなく逆転してしまい、舟橋も円地も山の手に移転していくことになる。

円地は幼児から歌舞伎によく連れていってもらい、祖母には江戸時代の読本や草紙、浄瑠璃や歌舞伎の台本などを読んで聞かせてもらった。彼女の作品は女の業や執念、怨恨などを描いていて、下町とか山の手とかいう範疇を超えているように見えるが、そのどろどろとした情念の世界は、彼女が幼児に感受した江戸文学に通じるものがある。むしろ根はそこにあったと言えないだろうか。彼女の下町に寄せる愛情は終生変わらなかったようだし、江戸文学に関する論考も数多く書いている。

永井龍男は舟橋聖一や円地文子と違い、活版屋に通う職人の子として明治三十七年に神田猿楽町で生まれた。典型的な下町の庶民である。高等小学校を卒業して、一時、米穀取引仲買い店に小僧奉公に出るが、病いを得て家に戻る。貧しい一家の心の機微を描いた短編『黒い御飯』を菊池寛に認められ、のちに文芸春秋社に入社して専務取締役にまでなるが、小説は終生、市井に埋れた庶民の生活を描きつづけた。登場するのも、癇性で、潔癖で、誇り高い人物が多く、作者その人の人柄を彷彿とさせる。文体も無駄がなく、歯ぎれがよい。江戸の職人気質に通じるのではないか。短編の名手と言われる。『石版東京図絵』や『昔の東京』『東京の横丁』など、よき時代の下町の風物や暮しぶりが活写されている作品に東京への愛情がにじみ出ている。

芝木好子は大正三年に北区王子で生まれ、幼い時に浅草東仲町に移り、そこで育った。父は浅草馬道で呉服商を営んでいた。後に経済学者大島清と結婚して山の手に住むことになるが、小説の上では終生、下町から離れること

Hosei University Repository

のなかった作家である。自伝的三部作『湯葉』『隅田川』『丸の内八号館』がある。『湯葉』は神田の湯葉商の養女であった母方の祖母をモデルにしたものであるが、『隅田川』には作者の分身恭子が数え年十七歳で登場してくる。大正末期から昭和初期にかけての変わりゆく浅草の風景が丹念に描写されていて、作者の思い入れの深さが感じとれる。関東大震災で焼け尽くされたために、江戸時代から続く老舗も新築の安普請に変わって、土蔵作りの店も少なくなった様子。カラスが多く、夕暮時、その大群が異様な叫び声をあげて慌しく頭上を渡っていく様子。完成したばかりの吾妻橋の鉄橋、両岸の工場から出る汚水で濁っている隅田川など、その時代が描きとめられている。この小説は父菊良が四十八歳で亡くなるところで終わり、次の『丸の内八号館』で恭子は五城経済研究所に勤めることになる。成長し、向上しようとする恭子。下町娘の一つのタイプである。そこには絶えず前進しようとしてきた作者自身の姿を読みとることが出来る。一種の人格形成小説（ビルドゥングスロマン）になっているのである。

芝木は染色家、日本画家、華道家、陶芸家、組紐作家など、一芸に身を捧げる女性を多く書いてきた。それらの女性たちは作者が好む下町の職人気質と作者自身の下町娘らしい向上意識とが結びついて生まれた人物像ではなかっただろうか。これらの作品の舞台は、たいてい上野、向島、浅草などの下町なのである。いかに執着が強かったかが分る。彼女の芸道小説は、故郷下町に寄せる熱い情念と山の手の西欧的な思念との一種の結合形態であったのであろう。

田久保英夫も昭和三年に浅草で生まれている。家は料亭であった。浅草花柳界の真中で育っているわけで、彼の濃密で、華麗で、淫蕩な感じのする文体はそういう環境から生まれたのであろう。自伝的な作品『解禁』などはその浅草花柳界を素材にしている。いかにも下町育ちらしい都会的な感覚が際立っている作風である。

吉村昭は昭和二年に日暮里で生まれた。江戸時代、日暮里は秋虫の鳴き声を聴く名所として知られていた道灌山の裾に広がっていた田園地帯であって、郊外ではあっても下町ではなかった。それが維新後、次第に住宅街に変貌していったわけだが、台地の崖下になっていたために人家の密集した場末の趣きが濃くなって、やがて下町と呼ばれるようにもなってきたのである。吉村も生まれ故郷を下町と捉えているようで、昭和六十年には『東京の下町』

Hosei University Repository

と題する本を出版して、昭和初年代の日暮里での暮しぶりをなつかしげに記している。夏祭りや縁日、ベイゴマや凧、演芸や相撲、それに戦争に向っていく時代の町の出来事が具体的に描いてあって、風物詩ともいうべき風韻をたたえている。愛惜の念の深さが分るエッセイである。『昭和歳時記』にも同じ趣きがある。彼には他にも『冷い夏、熱い夏』のような自伝的な小説があって、そこでも背景の日暮里が存分に描きこまれている。

川口松太郎は明治三十二年、浅草今戸で生まれた。家は左官屋で貧しく、小学校を卒業するとすぐに質屋へ小僧にやられた。下町の庶民の子では当り前のことである。その後も苦労しながら久保田万太郎に師事する。信吉ものと言われる自伝的な連作もあるが、『鶴八鶴次郎』や『明治一代女』などの大衆小説と劇作で名を成す。小学校卒業の学歴しか持たない下町生まれの作家は大衆小説家になる例が多い。なぜなのか。そこに日本近代化の歪みが顔を覗かせているとも言える。文学の近代化は即西欧化でもあったわけだが、その輸入された観念とは相容れない、もっと原初的な土着の思念にこそ真実を見つけ出し、それを大衆小説という形で表現したのではないか。ことによると伝統はそちらのほうに生きているのかも知れない。

大正十二年に浅草で生まれた池波正太郎も小学校卒業後、株屋の小僧になる。典型的な下町の庶民の子で、エッセイ『青春忘れもの』によれば、父方の伯母は一人が吉原仲之町の芸妓、一人が同じく仲之町で引手茶屋を経営しており、叔母は歌舞伎座で小鼓を打っている人の妻。母は浅草馬道の錺（かざり）職の娘という具合で、最も下町的な遊芸人と職人、両方の血を受け継いだわけである。『鬼平犯科帳』や『剣客商売』などに登場する粋で洒脱な人物像はこうした環境から生まれてきたものであろう。描かれている江戸の町は匂いまで伝わってくるようで、作者が肌で知っていることを感じさせる。

評論家でもあり劇作家でもある福田恒存は大正元年に本郷西片町で生まれたが、間もなく神田に移り、昭和十九年までそこに住んだ。父は東京電燈に勤めるサラリーマンであったが、父の兄弟は三人とも職人であり、母の家も職人であった。大宅壮一が『週刊文春』の「人物料理教室」という欄で福田恒存と対談したことがある。その中で福田は次のようなことを言っている。

Hosei University Repository

「下町で生まれ育ちながら、一方で大学教育まで受けたりすると感じ方が込み入ってくる。周囲には無学な人が多いから、その中で自分だけ最高学府を出るのは矛盾であって、インテリと大衆の二重生活だから解放されたインテリにはなりきれない。しじゅう自分の血が無学であることを知らされながら生きている」

「物を作る職人には尊敬の念を持っているし、職人気質が薄れていくのは嘆かわしい。インテリはどうせ偽者だから、虫が好かない。特に進歩的な傾向に食いつく田舎者には偽善の匂いを感じて反撥する」

彼は戦後、論壇の主流を占めたいわゆる進歩派に対して果敢に異を立て、保守派の論客として論争を挑んで喧嘩屋の異名をつけられたが、その反骨稜々たる姿勢も、神田という場所、環境を自分の思想の根拠としてしっかり位置づけているからこそ生まれたのである。地方から上京してきた人たちから地元の文化を守るために防衛的にならざるを得ないことを確信しているのである。

福田は下町人であることから逃げていない。正面から向き合い、引き受けている。そこに「自分には故郷がない」と言い切った小林秀雄との違いがある。この二人の相違は個別と普遍、具体と抽象という反背する二つのテーゼについて興味ある問題を提起している。福田は個別、具体を捨てなかったが、小林はそれを断絶し、普遍人、抽象人になろうとした。果してそれは可能であったのだろうか。内面に多くの圧殺したものが残っていなかったか、疑問である。

1のB　故郷下町を切り捨てて標準語の世界に脱出した文学者たち。

堀辰雄は明治三十七年に麹町平河町に生まれたが、生い立ちは複雑である。父、堀浜之助は裁判所の書記の監督であったが、正式の妻がいた。多分芸者であったろうと推測される母志気（堀は小説『花を持てる女』の中で断言はしていないが、そう匂わせている）との間に生まれたのが堀で、父に子がいなかったために堀家の嫡男になった。母の家は貧しく、母の弟妹は寄席芸人や芸者、茶屋奉公などになったと堀は書いている。堀が三歳の時に母は堀家を出て、向島小梅の彫金師上条松吉と結婚する。堀はその隅田川べりの小さな家で育ったのである。母は関東大震

Hosei University Repository

災の時に亡くなってしまい、その後は苗字の違う養父とともに暮す。府立三中、一高、東大とエリート・コースを歩み、先輩の芥川龍之介にかわいがられる。学費は堀家から送られてきた遺族扶助料で賄われたのであろう、と江藤淳は『昭和の文人』[6]の中で推定している。

堀はこの向島小梅での生活や自分の生い立ちについては余り作品化していない。わずかに『幼年時代』『三つの挿話』『花を持てる女』の三作品があるくらいである。しかし、これらの作品には真実を曖昧にぼかしたり、巧妙に虚偽の事実を折り込んだりしている箇所がいくつかあることが分っている。特に養父の死後に初めてほかに実父があることを母の妹から聞かされた、と『花を持てる女』で書いている点が問題となった。それが嘘であることは、佐多稲子の座談会での発言や福永武彦『内的独白』[7]江藤淳『昭和の文人』などによって明らかにされている。中でも江藤は厳密に『幼年時代』のテクスト・クリティークを行って、堀が幼い頃にすでに出生の秘密については知らされていたことを立証している。江藤は言う。

「堀辰雄が嘘をつき、世間を騙したのは、人倫の根本にかかわる大問題だ」

「その出発点を隠蔽することによって、――あるいはそのために――彼の文学をつくったのである」

「その文学的出発において、『ほんとうの道』から意図的に『逃げた』のである。（中略）架空の人工的空間のなかに、国籍不明の文学的嘘のなかに」

直視すれば恥しく、情けない現実から顔をそむけ、避暑地軽井沢や富士見高原を舞台に西欧ふうの心理的世界を彼は仮構した。それでも、わが胸の底に秘められた思いは一度は文章にしたかったに違いない。しかし、余りにも違い過ぎる現実の姿をリアルに描けば、築き上げた架空の文学世界が壊れてしまう。彼はそれを恐れた。となれば、事実を巧みに隠したり、変えたり、ぼかしたりして、実人生のほうを虚構化し、仮構の世界につなげるしかなかったのであろう。かなり辛い作業だったのではないか。

堀辰雄の後輩でもあり、弟子でもあった立原道造は大正三年に日本橋橘町に生まれた。家は荷物り用木箱の製造業であった。東大建築科を卒業する。軽井沢追分に滞在し、高原を舞台にした抒情的なソネット形式の詩を発表す

Hosei University Repository

る。愛と別れが主題であるが、遂に下町を素材にした詩は作られなかった。故郷とは完全に断絶した文学世界である。

大正七年に日本橋箱崎で生まれた中村真一郎も堀辰雄の弟子である。その影響を強く受けており、堀辰雄論をよく書いている。幼時に母を失い、母の実家静岡県森町と東京の間を行き来しながら育つ。中学生の時、父が亡くなり、親戚に引き取られる。幸福な幼少年期を過したとは言えないが、この時代のことを中村はまったく作品化していない。辛うじてある慈善団体から奨学金を受けて学業を続けたことをいくつかの作品の中で触れている程度である。フランス文学と平安王朝文学をベースとした人工的で繊弱で華麗な文学世界に飛躍する時、彼は貧乏くさい幼少年期と下町を切り捨てた。あるいは切り捨てることが目的だったのかとも疑われる。

石川淳は明治三十二年、浅草三好町に生まれた。多分、東京外語を卒業した後もここで暮していたに違いないと推測されるが、しかし、昭和十年に発表された『貧窮問答』で深川を描いているぐらいで、下町についてはわずかにいくつかのエッセイの中でごく簡単に触れているだけである。私小説的作法を忌避したためでもあろうが。

だが、直接書いてはいないものの、石川の場合、堀辰雄とは違って、強いて結びつければ、作品の基底に下町的な要素を見つけ出すことは可能である。戦後の混乱期に発表された『焼跡のイエス』や『黄金伝説』にしても、登場人物は戦災浮浪児であり黒人相手の娼婦である。社会の底辺にいる人間たちへの愛情が根にあると思われるが、これも庶民の間で育った人間だからと見ることは出来る。また、保守的な下町生まれにしては珍しく革命思想への共感を示し、晩年に至っても無政府主義的な反逆集団の戦いを描いたりしているが、これも貧しい庶民の暮しを知っているからとも考えられる。江戸文学への傾倒も下町生まれだからと言えば言える。晩年の現実性を無視したような象徴的な作品『紫苑物語』や『狂風記』などには不思議に川が出てきて、人々はその川を目指す。この川の原イメージを隅田川と推測することも出来るのである。多少強引だが、そう解釈していくと、石川は故郷下町を最も高度に昇華し、抽象化することに成功した作家ということになるのだろうか。しかし、それにしても彼が本音のところで下町をどう考えていたかは分らない。

Hosei University Repository

評論家の小林秀雄は明治三十五年に神田猿楽町で生まれた。父は東京高等工業助教授、日本ダイヤモンド専務取締役を歴任したが、彼が十九歳の時に亡くなる。同じ年に母も肺結核で喀血し、長男である彼は生活苦に直面した。そういう不安の中で思索をつづけていくわけだが、東京人であることに余り意味を認めなかった。昭和八年に発表された有名な論文『故郷を失った文学』の中から主要な箇所を引用してみると、

「私の心にはいつももっと奇妙な感情がつきまとってゐて離れないでゐる。言ってみれば東京に生れながら東京に生れたといふ事がどうしても合点出来ない。又言ってみれば自分には故郷といふものがない、といふやうな一種不安な感情である」

「自分の生活を省みて、そこに何かしら具体性といふものが大変欠如してゐる事に気づく。しっかりと足を地につけた人間、社会人の面貌を見つける事が容易ではない。一と口に言へば東京に生れた東京人といふものを見付けるよりも、実際何処に生れたのでもない都会人といふ抽象人の顔の方が見付けやすい」

これらの文章について饗庭孝男は『小林秀雄とその時代』[8]の中でこう言っている。

「江戸と東京との間の深い断絶とその上にうまれた不安な『抽象人』としての自覚をもちながら、その点に開き直り、『近代』化された東京と日本を重ねあわせることによって自己の立脚点を見出してゆこうという小林の覚悟がここにあらわれている」

生まれ故郷は存在しないという認識に立って、近代化された東京の抽象人たるべく開き直った、というのである。そうした飛躍を契機にしなければ、彼の文学世界は展けてこなかったのであろう。このような小林の姿勢を吉本隆明は、ある時期から「下りて」、徹底的に自己完成に向った、内的境地を追うようになった、と批判している。下りたとは即ち、何かに直面するのを避けた、何かを引き受けるのを拒絶した、という意味にとれる。知識人に下りることを強いる下町とは何と厄介な存在であろうか。

Hosei University Repository

1のC　AB二つのタイプのどちらにも組することが出来ず、両者の間を揺れ動く文学者たち。

芥川龍之介は明治二十五年、京橋入船町に生まれた。父の新原敏三は山口県の出身で、築地、新宿、八王子に牧場を持つ牛乳業者であった。生後間もなく母フクが精神に異常をきたしたため、本所小泉町の母の実家芥川家で養われ、後に養子となった。芥川家は代々御奥坊主で、養母は江戸の大通と言われ、文人や画家の保護者として有名であった細木香以の姪であった。芥川はこうして「江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的多く住んでいた町」（『回想記』）と彼自身が書いているごみごみした下町で、濃密な家族関係に囲まれて典型的な下町っ子として育った。故郷下町と肉親たちに寄せる彼の愛情は深かった。が同時に、同じ深さで嫌悪感や憎悪を抱くようになった。そのアンビヴァレントな、引き裂かれた感情から彼は終生、逃れ出ることが出来ず、次第に骨がらみになっていったのである。

明治四十五年、十九歳の時にすでに感傷的な筆致で次のように述べている。『大川の水』というエッセイである。

「自分はどうして、こうもあの川を愛するのか。あのどちらかといえば、泥濁りのした大川の生暖い水に、かぎりないゆかしさを感じるのか。（中略）自分は、昔からあの水を見るごとに、なんとなく、涙を落したいような、いい難い慰安と寂寥とを感じた」

「大川の水の色、大川の水のひびきは、われ愛する『東京』の色であり、声でなければならない。自分は大川あるが故に、『東京』を愛し、『東京』あるが故に、生活を愛するのである」

しかし、芥川はこの愛する東京とは無縁な虚構の世界を構築するところから作家として出発した。『或阿呆の一生』で「人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞い上った」と書いているように人工的な空想の世界に飛躍したのである、普遍的な倫理的テーマを掲げて。だが、そうしても根っこである下町をふっ切ることは出来ず、中期以降、次第に自己と肉親と故郷について書くようになっていく。下町へ回帰していったのである。断ち切るには下町の根っこは余りにも深く、強靭でもあった。それを小説化しない限り作家としての良心が許さなかったのかも知れない。

しかし、芥川は自伝的な作品を書く資質には恵まれていなかった。告白には適していなかった。自己を書けば書

Hosei University Repository

くほど解放されず、逆に追い詰められていく。そういう資質は下町的心性によるところが大きく、それが形成される経過については拙論『芥川龍之介＝「下町」の意味するもの＝』[9]で詳しく述べたが、内閉的に仮面をつけなければ自己確立が出来にくい街なのである。吉本隆明が『悲劇の解説』[10]の中で「構え」であると指摘し、佐藤春夫が『秋風一夕話』[11]の中で「チョッキを脱げない窮屈さ」と批判しているものも、同じ事情で生まれた。環境や人間関係から自己を防衛しなければならなかったのである。それが結果として悲劇につながっていった。

詩人、評論家の吉本隆明は大正十三年、京橋月島で生まれた。故郷下町にこだわりつづけていて、最近『都市はなぜ都市であるか』『像としての都市』『映像都市論』『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』などで都市についての論考を進めているが、その原点は月島への執着にある。『佃渡しで』という詩の一節にこうある。

「水に囲まれた生活というのは／いつでもちょっとした砦のような感じで／夢のなかで堀割はいつもあらわれる／橋という橋は何のためにあったか？／少年が欄干に手をかけ身をのりだして／悲しみがあれば流すためにあった」

佃渡しは昭和三十九年、佃大橋が完成した時に廃止されたが、この詩について後に吉本は次のように言っている。

「（月島は）都市の膨化に追いたてられ、やむをえず改装され、ペンキをぬりかえられる場末の安キャバレーにたていた。木下埜太郎よ、パンの会よ、明治の大川端趣味よ、おれがこの風景にとどめを刺してやるとおもってこの詩をかいた」

単なる下町抒情に対する反撥は強いものがある。悲しみは単純ではないのである。二重にも三重にも屈折している。

『東京詩集』[12]という全三冊のアンソロジーがある。その Ⅲ の巻で吉本は編者正津勉の質問に答えて、率直に故郷下町との心理的つながりについて述べている。

「ぼくが住んでまわった場所は、だいたい意図的に、下町的な息苦しさと親しさみたいなものの両方が重なっているような場所、境界点みたいな所を選んで住んできたように思います。（中略）やっぱり月島、佃島地域と、田端、

Hosei University Repository

日暮里、駒込あたりですね。もう少し前には御徒町にいましたけれども、（中略）二か所とも下町的な、ある意味では共同体意識が残っているような、あるいは閉鎖的な地域であるような、また同時に、ある意味ではゆったりとした自然体で人が住んでいられるような、そういう境界点に当たっています」

「ぼくの中では二重になっていて、ずるいといえばずるいんですが、たとえば下町的な情緒とか共同体意識みたいなものに触れたいときには、左の坂を下りる。また逆に、そういうのが煩わしく、うるさくて、大都会型の隣の家の人の顔も知らないような冷たい情念が欲しいときには、右の坂を下りればいい。なんかそういった境界線みたいな所を固執して選んで、転々としてきたような気がします。（中略）それが自分の中に二律背反的にあって、どっちかに強く傾けるというふうにはしないできてるんです」

下町へも山の手へもいつでも自由に行ける境界線に居を定める、つまり、個別と普遍とを思うままに往来できる位置を確保し、両者を意図的に疎通させておく、というのである。ある意味では綱渡りに似た危なさを持った姿勢だが、しかし、このような住む場所についての執拗なまでのこだわり、山の手には絶対に住みたくないという意志の堅固さは、明らかに下町人であることを生き方の根底に置いていることを示している。それは芥川や堀、立原に対する厳しい批判の根拠にもなっている。しかし、ここに辿り着くまでには、遠い東北の米沢高工に敢て進学し、息苦しい家族関係からの離脱を試みたり、組合運動に関わったり、安保反対運動に加わったり、種々の過程を踏んできている。そして、最近は都市論に傾斜するようになった。これはやはり、個別である故郷下町への回帰と見てもいいのではないだろうか。

小林信彦は昭和七年に日本橋両国で生まれた。家は老舗の和菓子屋である。母は山の手、青山南町の生まれ。子供の頃から月に一、二度、母の実家に連れていかれ、複雑な思いを経験する。いわば彼は下町と山の手の混血であり、そのことが後年の彼の文学的姿勢に強い影響を与える。戦争中、埼玉県飯能に集団疎開をしていたが、その間に実家は三月十日の大空襲で灰燼に帰してしまった。家と財産と父を失う。中学、高校は東京高師付属（現在の筑波大付属）に通う。山の手でも有数のエリートの子弟が集まる学校であったので、コンプレックスに悩まされる。

Hosei University Repository

彼はよく東京について文章を書いているが、その中の『私説・東京繁昌記』[13]では次のように言っている。

「山の手のエリートの子弟たちとの交際の距離のとり方がいまひとつ納得できず、教師はどれも欺瞞的に見え、肉親には嫌悪を感じるだけだった」

「私には、〈下町に対する憧憬〉などというものはないし、あり得ない。（中略）私はといえば息苦しい下町から脱出することで〈人生をスタート〉させているのだから、嫌悪感はあったとしても、憧憬などありようがない。しかし、少くとも故郷ではあるだろう、と問われるかも知れない。そういう私に故郷があるとすれば、それは〈戦前戦時の日本橋両国〉であり、それは三十九年も前に灰になっている。（中略）もっとも、歳を重ねることによって、下町（戦後の）を離れるバネとなった嫌悪感が薄らいできた」

彼は戸籍は両国（現在は中央区東日本橋）から移していないのである。あくまでも本籍は両国なのである。小説でも『ぼくたちの好きな戦争』などは戦争中の体験を踏まえて、空襲に怯える両国の人々を描き、意外に賑やかであった浅草を描いている。タイトルからして山の手文化人に対する反骨が感じられるし、演芸好きの彼の資質が少年期に養われたものであることを証拠だてている。

1のD　その他の下町生まれの文学者たち。

何人かを選んで解説を付けるにとどめたい。

明治十二年に日本橋通油町に生まれた長谷川時雨には『旧聞日本橋』[14]という著書がある。明治の東京の街並みや庶民の暮しぶりが生々と描かれていて、魅力がある。

アングラ演劇の旗手として知られ、『佐川君からの手紙』で第八十八回の芥川賞を受賞した唐十郎は昭和十五年に浅草で生まれ、下谷万年町で育った。樋口一葉の『たけくらべ』にも出てくる下谷万年町は、貧しい人たちの住む町として江戸時代から知られていた。自伝的な小説『下谷万年町物語』[15]はその町に住む人たちを描いていて、猥雑だが生気に満ちた下町の底辺の姿がよく写し出されている。

Hosei University Repository

昭和六年に日本橋堀留町に生まれた青島幸男は、家が仕出し弁当屋。直木賞を受賞した『人間万事塞翁が丙午』[16]は戦中から戦後にかけての弁当屋一家の逞しい日常を描いたもの。

昭和八年に大森で生まれた小関智弘は施盤工として大田区内の町工場で働きながら『羽田浦地図』[17]などの作品を発表している。大田区と言えば山の手の高級住宅地のイメージが強いが、ＪＲ京浜東北線をはさんだ反対側の海沿いの地帯は町工場がひしめくアンダー・ワールドである。日本の工業化を底辺で支えてきた町である。そこで敢て下町生まれの作家に加えた。下町には町工場で働く人たちが多い。昭和七年に江東区で生まれた早乙女勝元も一時、町工場で働いていた。早乙女にも町工場での体験を作品化したものがあるが、しかし、これらの人たちは一様に寡黙であって、小説家として出てくる人は少ない。その数少ない作家のひとりが小関である。『羽田浦地図』には黙々と働く下町人たちのつつましい姿が描かれていて、存在感がある。

昭和二十一年に荒川区尾久で生まれた評論家の富田均には『東京徘徊』[18]『私を愛した東京』[19]などの著書があり、上野、日暮里、田端、王子など東京北部周縁部の、下町というより場末への愛着を熱っぽく文章にしている。

昭和四年に豊島区池袋に生まれた詩人の諏訪優にも『谷中草紙』『田端事情』などの詩集がある。彼は初めテクノロジーと管理社会からの離脱を志向して、ビート・ゼネレーションの旗手と言われたが、やがて千駄木に住むようになってから、下町を徘徊する路上派詩人になった。図式的に言えば、抽象から具体へ、普遍から個別への回帰ということになるのかも知れない。だがしかし、なぜそれほどまでに下町に執着するのか。下町には根の深い日本の現実があるからではないか。浮遊感覚から醒めて、地に足をつけてみれば、そこに日本そのものの縮図があった、日本の土俗そのものがあった、ということではないだろうか。

（つづく）

注

（1）川本三郎『都市の感受性』（筑摩書房）

（2）エドワード・サイデンステッカー、安西徹雄訳『東京下町山の手1867～1923』（ＴＢＳブリタニカ）P.14

（3）エドワード・サイデンステッカー、安西徹雄訳『立ちあがる東京』（早川書房）

Hosei University Repository

（4）フィリップ・ポンス、神谷幹夫訳『江戸から東京へ』（筑摩書房）P.114 P.127
（5）エドワード・サイデンステッカー、安西徹雄訳『東京下町山の手1867～1932』（TBSブリタニカ）P.66
（6）江藤淳『昭和の文人』（新潮社）P.201 P.165 P.215 P.262
（7）福永武彦『内的独白』（河出書房新社）
（8）饗庭孝男『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）P.9
（9）高木利夫『「私」の表現』（古川書房）
（10）吉本隆明『悲劇の解説』（筑摩書房）
（11）佐藤春夫『退屈読本』（富山房百科文庫）
（12）『東京詩集』ⅠⅡⅢ（作品社）ⅢのP.84 P.87 P.90
（13）小林信彦『私説・東京繁昌記』（中央公論社）P.127 P.218
（14）長谷川時雨『旧聞日本橋』（岩波文庫）
（15）唐十郎『下谷万年町物語』（中公文庫）
（16）青島幸男『人間万事塞翁が丙午』（新潮文庫）
（17）小関智弘『羽田浦地図』（文芸春秋）
（18）富田均『東京徘徊』（少年社）
（19）富田均『私を愛した東京』（筑摩書房）